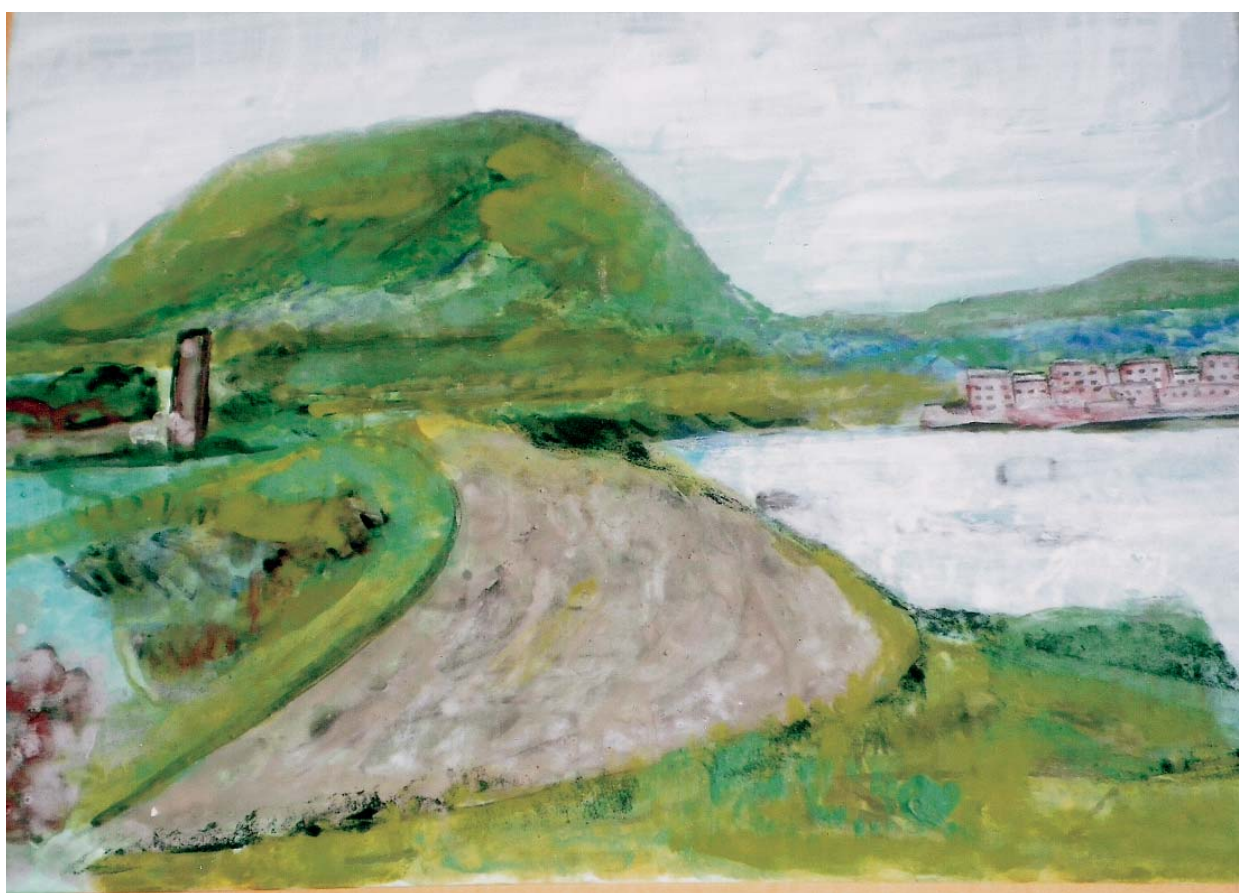


福井県医師会

だより

第596号 平成23年(2011)2月



済州島

福井市 宮越 洋二

表紙写真説明：済州島

福井市 宮越 洋二

この絵(日本画)は、韓国最大のリゾート地、済州島にある山の一風景です。済州島は韓国の最南端に位置し、一年を通して温暖なため「東洋のハワイ」と呼ばれているそうです。昨年秋、家内と旅行した時の作品です。韓国の食事は、魚介類が多く、我々日本人の口に合い不自由は感じませんでした。小松空港より2時間程で、楽しい旅でした。

醫 縫 録

最近の眼科事情

福井県眼科医会会長 奥 村 忠



医療崩壊が叫ばれて久しいが、眼科においても他科と同じである。眼科志望者の減少が著しく、平成6～15年の日本眼科学会の新入会者は平均して463名あったが、新しい医師臨床研修制度義務化後は激減し、平成22年の新眼科医の数は237名となっている。この傾向は耳鼻科・外科・脳神経外科でも同様であると聞いている。各県別の入局調査では東京都・大阪府などの大都会で123名と全体の52%を占め、ここでも大都会集中という実態が浮き彫りにされている。日本の眼科医数は約14,000名といわれており、眼科医が過剰であるかのように思われているが、現実として眼科志望者は減っており、このままでは、勤務医の数が減り、勤務医の勤務環境の悪化が懸念される。ちなみに福井県眼科医会の会員数はA会員32名、B会員40名、C会員5名の合計77名で、全国的にみれば下から4位に相当する。

4月の診療報酬改定では病院に厚く、診療所に厳しいものになった。特に手術料に関しては難易度の高い手術料が1.3～1.5倍になったのに対し、眼科診療所で多く行われている白内障に対する手術料は増えていない。この手術はディスポーザブル器具を多く使用するために、手術料に包括される材料費比率は60～80%と異常に高率となっている。医療経済の貢献度が高いこの手術料が見直されて良いのではないかという思いがしてならない。外来診療でいえば矯正視力検査、屈折検査、曲率半径計測および精密眼圧測定がそれぞれ5点ないし3点減点された。これは6月の診療報酬調査の結果を基に眼科は儲け過ぎと判定されたようであるが、眼科としては6月の診療報酬が多くなるのは確かであるが、11月から2月は大きく減少するのが通例である。このことを考慮しないで、単純に12倍して儲け過ぎと判定されるのは心外である。季節変動のある科は他にもあると思うが、この点を考慮していただかないと実情に合わないのではないかと考える。日本眼科医会の定点調査によると、診療所での4～6月分の前年比は総点数で-5.21%、1件あたりの点数は-4.98%と激しい減額となった。

日本医師会での全科平均(総点数+0.19%、1件あたりの点数-2.22%)と比べて、まさに眼科医療にとって危機を迎えたといわざるをえない状況である。

コンタクトレンズ(CL)診療については平成20年8月発行の福井県医師会だより第567号に原和彦前会長が詳しく述べておられるので詳細に述べる事は控えるが、その後の変化として全く規制のなかったカラーコンタクトレンズについても目のトラブルが多発することにより、通常のCLと同じ規制の対象となった。それでも非眼科医による不適切なCL処方や不十分な装用指導による目のトラブルは後を絶たず、非対面販売であるインターネット販売も規制されず、根本的な問題は何も解決されていない。ユーザーの不適切な使用が原因での目のトラブルも散見され、日本眼科医会としても実態調査をしているところである。

学校保健法の施行規則の改定によって、平成15年度以降、学校で色覚検査が実施されなくなった。当時小学4年生であった児童は検査を受けることなく今年4月に高校2年生となり、進学・就職に向かう時を迎えている。自らの色覚異常について知る機会のなかった生徒達が、今後それぞれの進路の選択、さらに進路先においてさまざまな問題と遭遇することが予想され、日本眼科医会ではこの問題に対しても今年度全国調査を展開しているところである。

先生方ご存じの如く、全身疾患と関係する眼疾患も多数あり、他科の先生との更なる連携が重要である。特に糖尿病網膜症は失明原因の第二位(数年前までは第一位)なので、網膜症の程度に応じた定期的な受診がなされているか否かをチェックすることは重要なことである。全身疾患と眼については先日発刊された日本医師会雑誌第139巻8号に特集が掲載されているので参考にいただければ幸いである。